

2024（令和6）年度 第2回 知床世界自然遺産地域

適正利用・エコツアーリズム検討会議

議事概要

日時：2025年2月20日（木）13：30～16：30

場所：羅臼町 羅臼漁業協同組合 3F 会議室

<議事>

1. 知床エコツアーリズム戦略に基づく提案の進捗状況
2. 個別部会等からの報告
 - (1) 厳冬期の知床五湖エコツアー事業
 - (2) 知床五湖地区における取組み
 - (3) カムイワッカ地区における取組みの進捗状況
 - (4) ウトロ海域における取組み
3. 関係機関からの報告
 - (1) 知床しゃりアクティビティサポートセンターの取組み
 - (2) ルサ地区での取組み
 - (3) 北海道東トレイルの開通について
 - (4) 国立公園指定60周年・世界遺産登録20周年記念事業について
4. インタープリテーション全体計画の策定状況について
5. エコツアーリズム戦略の見直しとエコツアーリズム検討会議の進め方について
6. その他
 - (1) 長期モニタリング計画に基づく調査結果の報告について

<出席者>

適正利用・エコツーリズム 委員

北海道大学大学院 農学研究院 教授	愛甲 哲也	
弘前大学 名誉教授	石川 幸男	web
北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 准教授	石黒 侑介	
北陸先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科 教授（座長）	敷田 麻実	
金沢星稜大学経済学部地域システム学科 講師	船木 大資	
株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役	松田 光輝	欠席
北海道立総合研究機構 エネルギー・環境・地質研究所 専門研究員	間野 勉	

以上、五十音順

科学委員会委員長

北海道大学 名誉教授	中村 太士	欠席
------------	-------	----

地域関係団体

ウトロ地域協議会	欠席	
特定非営利活動法人 知床斜里町観光協会 事務局長	新村 武志	
(一社)知床羅臼町観光協会 事務局長	和久井 一躬	
知床ガイド協議会	欠席	
公益財団法人知床財団 理事長	村田 良介	
同 事務局長	玉置 創司	
同 事業部 部長	山本 幸	
同 事業部 参事	秋葉 圭太	
同 事業部 参事	福田 一輝	
知床自然保護協会	欠席	
斜里山岳会 副会長	山中 正実	web
羅臼山岳会	欠席	
羅臼遊漁釣り部会 事務局	天野 美樹	web
知床小型観光船協議会 会長	神尾 昇勝	
知床羅臼観光船協議会 会長	長谷川 正人	
一般財団法人自然公園財団 知床支部 主任	向山 純平	
同 知床支部 主任	伊治 弘貴	
知床ウトロ海域環境保全協議会	欠席	

以上、設置要綱記載順

関係行政機関

斜里町 産業部 商工観光課 課長	南出 康弘	
同 産業部 商工観光課 観光係長	岩渕 聖也	
同 総務部 環境課 課長	塩 幸也	
同 総務部 環境課 自然環境係 係長	吉田 貴裕	
羅臼町 副町長	川端 達也	
同 産業創生課 まちづくり担当課長	伊藤 芳征	
同 産業創生課 商工観光係長	川口 勇也	
同 産業創生課 自然保護担当	田澤 道広	
同 企画財政課 参事	三宅 悠介	

事務局

環境省 釧路自然環境事務所 所長	岡野 隆宏	
同 釧路自然環境事務所 国立公園課 課長	柳川 智巳	
同 釧路自然環境事務所 国立公園課 世界自然遺産専門官	吉田 宗史	web
同 釧路自然環境事務所 国立公園課 係員	白井 義人	
同 釧路自然環境事務所 ウトロ自然保護官事務所 首席国立公園保護管理企画官	二神 紀彦	
同 釧路自然環境事務所 ウトロ自然保護官事務所 国立公園利用企画官	伊藤 薫	
同 釧路自然環境事務所 ウトロ自然保護官事務所 国立公園管理官	加倉井 理佐	
同 釧路自然環境事務所 羅臼自然保護官事務所 自然保護官	西村 健汰	
林野庁 北海道森林管理局 計画保全部 計画課 課長	寺村 智	web
同 北海道森林管理局 計画保全部 自然遺産保全調整官	工藤 直樹	web
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 所長	川崎 文圭	
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 生態系管理指導官	作田 明	
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 専門官	寺田 崇晃	
同 北海道森林管理局 網走南部森林管理署 署長	山之内 弘幸	web
同 北海道森林管理局 網走南部森林管理署 森林技術指導官	清水 亜広	web
同 北海道森林管理局 根釧東部森林管理署 署長	鷹野 孝司	
同 北海道森林管理局 根釧東部森林管理署 森林技術指導官	杉原 優人	
北海道 環境生活部 自然環境局 自然環境課 課長補佐(公園保全)	高田 一貫	web
同 環境生活部 自然環境局 自然環境課 主査(知床遺産)	真野 英世	
同 経済部 観光局 観光振興課 主幹(AT調整)	伊東 美弥子	web
同 経済部 観光局 観光振興課 主事	松原 巧実	web
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係長	小川 耕平	web
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係 主事	宮崎 祐伍	web
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 知床分室 主幹	三井 義也	web
同 根室振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係長	河崎 淳	web
同 根室振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係 主事	小林 洸也	web
国土交通省 北海道運輸局 釧路運輸支局 首席運輸企画専門官	新堂 聡史	web

運営事務局

公益財団法人 知床財団 事業部 羅臼地区事業係	坂部 皆子	
同 事業部 羅臼地区事業係	谷 洸哉	
同 事業部 羅臼地区事業係	宮腰 みずき	
同 事業部 公園事業係	仁木 可奈子	

※1 議事概要の記述において、発言者の敬称・肩書などは省略しての記載とした。行政関係者の所属については、一部略称を使用した。

※2 文中、検討会議は適正利用・エコツーリズム検討会議の、WG はワーキンググループの、AP は河川工作物アドバイザー会議の、ML はメーリングリストの、それぞれ略称として使用した。

＜議事概要＞

西村：令和6年度第2回適正利用エコツーリズム検討会議を開催する。開催地である羅臼町より川端副町長にご出席いただいている。川端副町長よりご挨拶をいただく。

川端：本日はエコツーリズム検討会議を羅臼町にて開催するにあたり、ご多忙の中、羅臼町までお越しいただき感謝申し上げます。冬季の羅臼町での開催に際し、天候が最も懸念される要素であったが、本日も朝から雪が降っていたため、開催が危ぶまれた。しかし、無事に開催できたことをうれしく思う。今年は全国的に雪が多く、普段は雪が降らない地域でも降雪が見られている。特に日本海側の地域では連日の大雪により、除雪作業にご苦労されている状況にあると認識している。また、流氷に関しては、先日、紋別沖から網走地域まで到達したことが報道されていたが、羅臼町まではまだ到達していない。この状況は気がかりではあるが、間もなく羅臼町にも流氷が訪れるものと予測している。流氷が到来することで、羅臼町および観光客の間で大きな喜びが生まれ、さらに賑わいが増すことを期待している。かつては冬季の羅臼町は閑散期というイメージがあったが、近年、観光船事業者の努力もあり、宿泊施設が満室になるほど、インバウンドを含む多くの観光客が訪れていることを大変ありがたく思っている。しかし、多くの観光客に訪れていただいている一方で、観光事業者の数が少なく、コンテンツの開発が羅臼町の課題となっている。また、以前から指摘されているガイド養成の進捗も十分ではない状況にある。訪れる観光客に対して、観光船以外にも羅臼の自然、歴史、文化、産業を体験してもらうための環境整備が必要である。今年は世界自然遺産登録20周年という節目の年であり、環境省、林野庁、北海道、その他関係機関と連携して、各種事業を展開する予定である。これにより、本年は注目を集める年になるものと考えている。観光振興を推進するにあたり、多くの課題が存在するが、観光産業を持続可能にするためには、このエコツーリズム会議が重要な場であると認識している。本会議において、建設的な意見交換が行われることを期待する。最後に、敷田座長が本年3月末をもって退任されると伺っている。これまで多大なるご尽力を賜り、深く感謝申し上げます。今後も知床のために助言をいただければ幸甚である。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

西村：川端副町長、誠にありがとうございました。川端副町長はこの後、公務の都合により退出される予定である。続きまして、環境省釧路自然環境事務所の岡野よりご挨拶を申し上げます。

岡野：本日は年度末のご多忙の中、また、冬季の観光シーズンの最中に参集いただき、誠に感謝申し上げます。流氷がなかなか到達せず、地域の皆様も心配されていたが、ようや

くウトロに到達したとのことであり、これにより地域への注目がさらに高まるものと考えている。今年の世界自然遺産登録 20 周年という節目の年であり、これまでの関係各所の尽力により、知床の自然環境保全と持続可能な利用の両立に向けた取り組みが進められてきた。本会議はこれまでの歩みを振り返り、さらに前進させる重要な機会である。本日の検討会議では、議題が多岐にわたるが、個別部会および関係機関からこれまでの取組状況を報告いただく予定である。また、環境省が進めるインタープリテーション全体計画についても報告する。本計画は、地域の価値を地域住民の意見を取り入れながら深め、それをいかに来訪者に伝えるかを考えるものである。計画の策定状況についても報告する予定である。また、策定後のインタープリテーション全体計画はエコツーリズム戦略の見直しに反映させたいと考えている。さらに、エコツーリズム検討会議の今後の進め方についても議論を深めていきたい。本日は 3 時間という限られた時間ではあるが、参加者から忌憚のない意見をいただき、地域が自然環境の保全と持続可能な利用の両立をより良い形で実現できるように議論を進めたいと考えている。どうぞよろしくお願いする。

西村：次に、委員の出席状況について報告する。本日は、敷田座長、愛甲委員、石黒委員、船木委員、間野委員の 5 名が現地参加している。石川委員はオンライン参加、松田委員は欠席である。また、科学委員会の中村委員長も欠席との連絡を受けている。次に、本日の資料について確認する。議事次第の裏面に一覧表を掲載している。資料の不足があれば、運営事務局に申し出ていただきたい。なお、本検討会議の資料および議事概要は、後日、知床データセンターで公開される。それでは、以降の進行を敷田座長にお願いする。

敷田：この会議では、自由に意見を述べることを基本としている。発言内容について、直ちに責任を問われたり、批判されたりする場ではない。遠慮せず発言していただきたい。団体や組織としての発言と、個人の意見は区別して、発言願う。個人の意見が言えないというわけではなく、個人の意見を述べる場合は、「個人の意見である」と前置きをした上で発言してほしい。もちろん、団体や組織を代表しての発言も歓迎するので、同様に扱う。進行を円滑にするため、反対意見を述べる際には、別の意見があるという形で表現してほしい。この会議には多くの参加者がいるため、毎回多様な意見が出るが、いずれも大切な意見である。最終的な結論は別として、発言一つひとつは尊重されるべきだと考えている。以上のように会議の進行に協力をお願いする。本日は 3 時間の会議時間の中で途中で休憩を設けるが、議題が多いため、迅速に進行する。議事は配布済みの会議次第に沿って進行する。副町長からの案内にもあった通り、天候の影響や説明者の到着遅延などにより、議題の順番を変更する可能性がある。その際は、座長に一任いただきたい。進行に関して質問や要望があれば、遠慮なく伝えてほ

しい。最初の議題は「知床エコツーリズム戦略に基づく提案の進捗状況」である。これは定例の報告事項であり、環境省からの説明をお願いする。

1. 知床エコツーリズム戦略に基づく提案の進捗状況

資料 1 知床エコツーリズム戦略に基づく提案の進捗状況

…環境省・二神が説明

敷田：説明に感謝する。質疑がないため、本議題の説明を終了する。

2. 個別部会等からの報告

(1) 厳冬期の知床五湖エコツアー事業

資料 2-1 2024 年度 厳冬期の知床五湖エコツアー事業計画

…知床斜里町観光協会・新村が説明

敷田：説明に感謝する。報告に関して質問や意見があればお願いします。質問がなければ私から質問する。今年度はまだ途中ではあるが、1 月、2 月の状況を見ると、昨年の 135 人を上回っている。参加人数はかなり増加しているが、催行回数は例年通り約 400 回程度で推移しているように見受けられる。催行回数は同じか。

新村：強風や吹雪により午前・午後の部が中止となった日もあったが、それ以外の日は順調に催行されている。

敷田：確認したいのは、1 回の催行あたりの参加者数に変化がないかという点である。

新村：数字で申し上げますと、2 月 3 日（日曜日）が最も参加者が多い日であった。午前 46 名、午後 80 名、合計 126 名が参加した。他の日も安定しており、1 日あたり 80 名から 90 名程度の参加者がいる状況である。

敷田：そうすると、1 回あたりの参加者は 10 名を超える心配はないという理解でよろしいか。

新村：その通りである。10 名を超えることはない。

愛甲：これはシーズンが終了した次回の部会または検討会議での報告事項になるかもしれないが、今年は参加者が多いということであった。この厳冬期の知床五湖エコツアーは、静寂さを味わっていただくことも目的の一つとして重要であった。参加人数が増

加した一方で、10 人ごとのグループの分散具合や曜日ごとのばらつきに変化があったかどうかにも評価する必要があると考える。過去のデータと比較して、1 回あたりの密度や午前・午後ごとの状況を分析していただきたい。

敷田：愛甲委員のおっしゃる通りである。全体で共有している基準は 150 人と 10 人である。また、特定の時間帯に集中して静寂性を損なうような状況がないかも重要である。次回以降、資料の整理、説明の方法を見直していただきたい。

新村：承知した。資料の分析をより詳細に行い、次回に報告する。

敷田：作業が増えてしまうが、すべてを細かく分析せよというわけではなく、特定の時間帯に集中していないかを確認できれば十分である。特にないようであれば、次の議題に進む。

それでは、2 番目の議題である「知床五湖における取り組み」について報告する。これも定例の報告事項である。

（２）知床五湖地区における取組み

資料 2－2 知床五湖における取組の進捗状況について

…環境省・加倉井が説明

敷田：説明内容について、意見や確認したい点があればお願いします。大きく分けて、利用調整地区の運用に関する事項と、スイレンの除去に関する議題である。

石川：来年度は時期や方法について、具体的にどのような改善を行う予定かを確認したい。

加倉井：今年度は 5 月中旬から除去作業を開始したが、大きな成果は見られなかった。除去は実施したものの、効果が薄く、小さな葉を除去するだけの状況が続いていた。したがって、実施時期の工夫としては 5 月ではなく 6 月頃から本格的に開始することを検討している。また、6 月を過ぎると除去のスピードが追いつかなくなる状況が見られたため、7 月・8 月に重点を置いて実施する予定である。除去方法については、スイレンのみが生育している場所や、ネムロコウホネやヒルムシロなど他の植物が混在している群落があるため、それぞれの状況に応じた対応を検討している。具体的には、スイレンのみの群落に対しては機械を導入して刈り取ることを検討中である。一方、混在している群落については、人力での除去を継続する方向で検討している。

石川：私も気になって、インターネット等で調べてみた。福島県の昭和村では、地下部を含

めて徹底的に除去した結果、成功した事例がある。これらの事例から学び、改善の参考にしていただきたい。スイレンは水中だけでなく、根の部分も徹底的に除去する方法を考える必要があるように思う。様々な在来植物が混在しているので作業は困難を伴うかもしれないが、除去するのであれば徹底的に行うことを検討する必要があるのではないか。

敷田：福島県の事例を挙げ、徹底的に除去すべきという意見が出されたが、その方針で進めるのか。また、展望がないと復興作業に携わる人々の意欲が低下する可能性がある。管理者としての方針はどのように考えているか。

加倉井：外来植物はどれも同様であるが、中途半端な対策では効果が出ずに終わる可能性が高い。ボランティアに参加した方からも、「6月に除去作業を行ったが、8月には元通りになっていた」という意見があった。今後は、様々な工夫を凝らして、最終的には除去を完了させるという目標を掲げて進めていく考えである。

敷田：しかし、現時点での回答では方針が明確ではないように思える。今後の対策をどのように進めていくのか。10年前の写真と比較すると、状況が悪化していることは明らかである。このまま放置するのか、ボランティアに依存して適当に除去を続けるのか、今後の方針を明確にしてほしい。

岡野：以前、専門家から「長い時間はかかるが、葉をとっていくことでスイレンの勢いを減少させられる」との指導を受けていたため、その方針に従って実施してきた。しかし、実際には勢いが増している状況である。除去と環境への影響の両立を図りながら、今後の対策を検討していく。昨年の実施状況を踏まえ、今後は機械の導入も検討している。また、除去後の運搬方法も課題となるため、併せて検討を進めていく。特に一湖は知床五湖でも一番利用者も多く、重要なエリアであるため、しっかりと対応を考えていきたい。

長谷川：思い切って徹底的に対応した方がよい。場合によっては歩道を閉鎖してでも実施すべきである。そうでなければ、雑草のように広がってしまう。中途半端に行うのではなく、予算を惜しまずに徹底的に対応すべきである。

敷田：長谷川氏からは、徹底して対策を講じるべきとの意見があった。この意見を踏まえ、再検討をお願いしたい。

愛甲：現在、5月頃から葉の除去を行っているが、この作業時期と作業量の関係を考慮する

と、5月の段階で除去を行うことが効率的であるかは疑問である。5月はまだ展葉が進んでいない時期であるため、7月以降の展葉が著しい時期に集中的に除去を行う方が効率的ではないかと考える。単に回数を増やしても効果が見えにくく、効率が悪い可能性がある。そのため、スイレンの専門家の意見を仰ぎ、スイレンの生態に合わせた除去方法を検討する必要があると考えるが、いかがか。

敷田：この点について、何か回答があるか。

岡野：先ほどの説明にもあったように、小さな葉を除去していても追いつかないことが昨年の作業で明らかになっている。そのため、来年度はもう少し葉が大きくなってから除去を行うことで、作業時期を後ろ倒しにし、効率化を図りたいと考えている。

敷田：この問題は容易に解決できるものではないが、非常に重要な場所であるとの認識は、会場の参加者全員に共有していると思われる。そのため、次回の会議までに今後の方針を整理していただきたい。これまでの説明のとおり、除去作業には多大なコストがかかる。また、場所によっては、除去が困難であり、最悪の場合、放置するという選択肢も考えられる。無駄な労力を避けるための選択肢も考慮する必要があるため、これらを踏まえて検討してほしい。

秋葉：現地での作業を我々も共に行っている。決していい加減に作業を行っているわけではなく、また、労力を惜しんでいるわけでもない。現場の特殊性を考慮し、重機の導入も検討している。その上で、まずは手法の開発を進めているところである。展葉の期間や、どの程度の労力をかければどの程度スイレンが減少するのかといった点についても、専門家の助言を受けながら実施している。現時点での成果が十分ではないという評価はその通りであり、我々も認識している。しかし、やみくもに作業を行うのではなく、次のステップへ進むための段階と考えている。現在、正確な知見の収集およびモニタリングの手法開発を進めており、ようやく状況が見え始めた段階であることをご理解いただきたい。

敷田：本件についてはすぐに解決策を出すことは難しいが、重要な課題であるため、次回の会議までに方針を検討する必要があると考える。五湖の取り組みの内容を超える議題ではあるが、今後の方向性を検討することが適切であると考えている。

二神：外来植物対策としても取り組む必要があると考えている。

敷田：来訪者向けに（持ち込まれた）スイレンの繁殖拡大の説明は行っているか。

二神：一湖の展望台にて、ラミネート加工した資料を設置し、外来種および除去活動の周知を行っている。設置している説明板には、現在繁茂しているのは園芸スイレンであり、かつて見られた一湖に映る逆さ知床連山が現在は見られなくなったことを記載している。

敷田：訪問者の中には、現在の状態が知床の自然な姿であると誤解する人もいるかもしれないため、誤解を避けるための説明を充実させる必要があると考える。

二神：承知した。現在も説明を行っているが、さらにわかりやすいものを検討したい。

敷田：除去の努力についても記載することが望ましい。

二神：承知した。

岡野：今回の取り組みにあたっては、ガイド事業者の協力も得ている。訪問者への案内時に、外来種対策についても説明を行っており、地域住民と連携して情報を共有することが重要であると考えている。

敷田：知床の自然の素晴らしさを伝えることも重要であるが、現実の課題に対して取り組んでいる状況を正確に伝えることも重要である。隠すことなく、正確に説明することが望ましい。

船木：来年度以降は、除去時期を後ろ倒しにすることや、機械の導入を検討しているとのことだが、大規模に実施することは観光への影響を避けられない。特に7月から8月は観光のピークにあたるため、観光体験の質を保ちながら効率的に作業を行う工夫が必要である。実施の時間帯や方法を考慮する必要がある。

敷田：非常に重要な問題であるため、いただいた意見を反映し、次回までに方針を検討して欲しい。また、除去作業を進めるための協力体制についても考慮していただきたい。長谷川氏からの発言にもあったように、羅臼町の方も一生懸命に考えている。来年度はさらに多くのボランティアが必要となることが予想されるため、協力を呼びかけていただきたい。羅臼町の方々も、これは斜里町だけの問題ではなく知床全体の問題であるため、より多くのボランティア参加の呼びかけに協力を願う。それでは、これにて知床五湖に関する議論を終了し、次にカムイワッカ地区における取り組みの進捗状況について報告を行う。

(3) カムイワッカ地区における取組み

資料 2-3 カムイワッカ地区における取組の進捗状況について

…斜里町・岩渕が説明

船木：説明の中で第 1 フェーズという言葉があったが、その後の第 2 フェーズ、第 3 フェーズといった長期的な計画は既に策定されているのか、確認したい。

岩渕：現時点において、第 2 フェーズ、第 3 フェーズといった長期的な計画は存在しない。第 1 フェーズの中で、試行事業で実施できなかった事項を重点的に行うことに加え、カムイワッカ園地の基本構想、すなわち利用の在り方をより具体化する方針である。この 3 年間で、基本構想を練り上げる考えである。

船木：第 1 フェーズを進めながら、長期的なビジョンを策定するという認識でよいか。

岩渕：その通りである。

石黒：説明に感謝する。別紙は大変よくまとまっており、興味深く拝読した。18 ページに記載されているアクシデント・インシデントに関する情報が現地のホワイトボードに掲示されていると認識しているが、この情報はどのようなプロセスで作成され、どの程度の頻度で更新され、利用者にはどのように周知されているのか、教えていただきたい。

岩渕：プロセスに関しては、事業開始当初は、現地に立つ補助員が利用者に対して「危険がある場所」について説明していた。しかし、その説明内容が補助員ごとに異なり不足等が生じたため、ホワイトボードに情報を集約し、補助員全員が共通の情報を旅行者に伝えることを目指した。以上がこの取り組みが開始された経緯である。情報の更新については、基本的に毎日見直しを行っている。気温や水温など、その日の状況に応じて随時更新しているため、毎日情報を更新している。

敷田：前回の検討会議において、上限人数の制限について議論があった。その際、210 名に制限するとの決定がなされたが、この点に変更はないか。

岩渕：210 名の上限に変更はない。1 時間あたりの人数制限も変更はない。大枠は変えずに、フェーズという新しい言葉で計画を策定した。

敷田：これは町で運営する事業である。以前の報告によれば収入は約 1,500 万円であった。今後、この収入規模はどのように変化させていく計画か。

岩渕：2024 年度の事業については、赤字となってしまうため、今後収入を増やしていく必要があると考えている。2025 年度においては料金の改定を考えていないが、今後は収入増加を視野に入れた検討が必要であると考えている。

敷田：不足する分は町が補てんする方針であると理解してよいか。

岩渕：赤字の要因としては、前年度からの繰越分が多かったことによる部分大きい。従って、現時点では町で大きく補填する予定はない。ただし、2025 年度については国費等の導入も検討しながら安定的な運営を目指す必要がある。

敷田：運営を安定させ長期的な展望を描くために、前回の検討会議で森林管理局に対して「土地の貸借契約に関して 1 年契約では町が長期的な計画を立てにくい、長期の契約ができるように検討してほしい」と私の方から要望をしたが、その検討はしていただけか。

清水：網走南部森林管理署より回答する。現在、斜里町と協議中であり、複数年契約、複数年貸付の契約とできるよう検討している状況である。

敷田：3 年間の契約に移行するということだが斜里町はその方向性でよろしいか。

岩渕：そのとおりである。これまで 1 年契約であったが、現在、3 年間の契約を希望し、協議を進めている。

敷田：承知した。経営の安定化は環境への影響を最小限にするためにも重要である。経営が不安定になると現場への負担が大きくなるため、長期的な展望を以て取り組みを進めていただきたい。それでは、カムイワッカ地区における取り組みの進捗状況に関する報告と、それに対する質疑を終了する。

(4) ウトロ海域における取り組み

資料 2-4 ウトロ海域における保全と利用の取り組みの進捗状況について

…資料での確認とする

敷田：ケイマフリの生息・繁殖状況に関して、2010 年以降営巣数は大きく変わってはいな

いが、個体数が一貫して増加傾向になることについて、何かコメントできる点があればお願いしたい。

西村：今回の調査は、環境省の発注業務の一環として実施しており、知床データセンターに今年度の調査結果も掲載予定である。詳細な内容はそちらに掲載される予定である。今年度の調査分は、報告書がまだ提出されていないため、最新の傾向については確認中である。ただし、これまでの傾向としては、個体数が増加していることが確認されている。

敷田：増加傾向にあることは理解しているが、その理由を確認したい。疑っているわけではないが、なぜ営巣数が変わらず個体数が増えるのかの理由が知りたい。この場での回答が難しければ、関係者に確認をして回答してほしい。

西村：現時点では、具体的な理由を即答することはできないため、確認の上で報告する。

敷田：それでは議事 2 について終了し議事 3 に移るが、その前に前回まで議論があった斜里町の幌別地区の利用のあり方について、資料は用意していないが、経過を口頭で報告していただきたい。

吉田：本日、資料は用意していないが、前回のワーキンググループで報告して以降、特段の進捗はない。今後については、地域との協議を進めながら丁寧に進めていく考えである。以上、簡単ではあるが報告とする。

敷田：報告に感謝する。幌別地区に関しては、一度事業が停止したが、関係者との協議に時間を要しているという認識でよいか。

吉田：その通りである。

敷田：それでは、これで議事 2. 個別部会等からの報告を終了する。次に、議事 3. 関係機関の取組み報告に移る。(1) 知床しゃりアクティビティサポートセンターの取組みについて報告をお願いする。

3. 関係機関の取組み報告

(1) 知床しゃりアクティビティサポートセンターの取組み

資料 3-1 知床しゃりアクティビティサポートセンターの設置について

…斜里町役場商工観光課・南出が説明

敷田：説明に感謝する。この内容については、大変重要な説明をしていただいた。質問やコメントがあれば願います。リスクの関係であるため、知床小型船観光協議会と知床羅臼観光船協議会から補足や発言はないか。

長谷川：羅臼にも知床しゃりアクティビティサポートセンターに準ずる安全管理を目的とした組織が存在する。予算も手間もかかるが、どんなに万全を期してもヒューマンエラーをなくすことはできないため、このような安全管理を目的とした組織が斜里町にあるのは非常に重要である。

敷田：発言感謝する。羅臼には別のやり方があるかもしれないが、斜里町のこのような取り組みは非常に重要だという意見である。

敷田：他に意見がなければ私からだが、この知床しゃりアクティビティサポートセンターの設置は、去年のアクティビティリスク最終報告書の内容を反映してのことだと思われる。聞き漏らしかもしれないが、センター設置の目的が資料に書かれていない。知床しゃりアクティビティサポートセンターの設置目的、活動目的をわかりやすく教えてほしい。

南出：知床しゃりアクティビティサポートセンターは斜里町内の組織であり、自然体験アクティビティのリスクを可能な限り低減し、マネジメントを行うことで自然アクティビティの安全確保を図っていくことを目的とする。主な事業としては、自然アクティビティの総合的な情報発信・提供、指定団体の支援等を行いながら、安全確保に努めることを目的として設置された組織である。

敷田：説明感謝する。リスクに関する情報の収集と発信がこの組織の目的という理解でよい。

南出：それらを含めたことを行う組織である。まずは第一に情報発信・収集があると考えている。

敷田：それを各事業者がやらずに、町全体として実施する理由を教えてください。

南出：現在、個別の事業所ごとに安全対策ルールを定め、利用者への周知に努めている。しかし、斜里町全体としてまとまったものが整理されていない現状があるため、改めて組織を設立した中で、斜里町におけるアクティビティの安全対策等を整理し、発信す

る窓口としていきたい。

敷田：それは斜里町としての全体的な底上げと、それぞれの事業者が持っている知識の共有と理解してよいか。

南出：そうである。

敷田：また、資料３－１の３の(3)にある、「一般利用者向けのリスク発信方法・内容」というのは、情報のことか。

南出：一般的なリスクについては、当組織から改めて発信していく予定だが、詳細な発信内容については現時点では精査中である。

敷田：斜里町として、ここで言う「リスク」とは何か。カタカナでリスクと言われても、日常用語ではないため、意味が分かりにくい。

南出：気象情報や場所ごとの情報をあわせ、一般的な危険性を周知することを考えている。

敷田：リスクとは危険のことと考えてよろしいか。

南出：一般的な危険、ケガ、事故等が発生する可能性ということであると考えているが、そこも含めてこれから精査していきたい。

敷田：説明感謝する。今の件に関して発言があればお願いします。

間野：昨年この話を伺った際、アクティビティサポートセンターを設置するというのはとても良い取り組みだと思った。そのうえで、本日改めて話を伺い、目的や目指すところが曖昧な印象を受けた。リスクの洗い出し、リスクに対する方針検討、情報発信の重要性は理解できる。しかし、リスク管理には、利用者と事業者が具体的なリスクを理解し、必要な手立てを事前に講じる必要がある。目指すものは「ルール共有・順守の徹底」である。具体的に、何をどのように行うべきかという明確なデータを示し、事後検証において、守るべきものを守らなかった、把握できたはずのリスクを把握する努力をしなかった、リスクを把握していたにもかかわらず無視した、という風に、後から「やってはいけない」と皆が納得できるもの、万が一のことが起きた際に「ルールに反したからそうなった」と明確に言えるものをあらかじめ提示するということを目指す段階であると理解している。それを念頭に置いたとき、次年度の予定にそれが

具体的に見えない。例えば、「収集を行い事業者での共有を実施」とあるが、最終的には、実際に使えるものを事業者内で精査・徹底し、現段階で守らなければならない基準やルールを斜里町独自に確認、徹底させていく必要がある。そのようなスタンスが必要ではないかと思うがいかがか。

敷田：発言感謝する。複数の確認があった。南出課長、お答えいただけるか。

南出：リスクの洗い出しは現在も進行中であり、ガイドから得た意見をもとに8～10個程度の項目を抽出している。当然ガイドはこれらのリスクを認識して活動しているが、改めてガイドに再共有し、共通認識を図りたい。一方で、共有しただけでは何も進展しないため、共通認識を基に、何から取り組むべきか検討しつつ、まずは危険性があることを発信する。危険性を発信する啓発活動と並行し、具体的な対策を検討していく。事業者への共有、利用者への情報発信体制の構築、安全対策の具体化など、まだ動き出したばかりで見える形で進んでいない部分もあるが、いただいた意見を参考に具体的なものにしていきたい。

敷田：間野委員よろしいか。斜里町からの回答は、リスク情報を共有・発信し、利用者に届けることが基本。しかし、その先の展開については、前回の報告書説明時にも議論があったように、困難な点がある。斜里町の試みは前向きなものであるため、計画的に進めてほしい。検討協議会の座長であった石黒委員から補足することはあるか。

石黒：間野委員の指摘はもっともであり、それを目指している。一方で、空間的な広がりも多く、アクティビティの種類は無数にあり、プロのガイドが帯同ものから来訪者が個人的に体験するものまで、あらゆる場面にリスクが内在しているため、現状ではリスクへの対処を面的に行うのが難しい。将来的に面的な対処ができるよう、まずは最も事業者数が多いと想定されるガイドが普段認識しているリスクを収集し、その中で個人旅行者への喚起につながる情報を発信していく。これは、コアが見えない中で外堀を埋めていくような活動であるが、現状ではそのような段階である。現在私もアドバイザーとして関わっているため、間野委員や敷田座長の指摘を踏まえ、組織の目的を見失わないよう、試行錯誤を繰り返していきたい。

敷田：発言に感謝する。知床観光船事故があったことを抜きにしても、リスクの管理・共有とマネジメントは、知床の利用者全員が共有すべき考え方である。ぜひ推進していただきたい。

敷田：他に意見がなければ、次の議題へ進む。

(2) ルサ地区での取組み

資料３－２　羅臼町のルサ川における河川改修の方向性について

…羅臼町役場産業創生課・田澤が説明

敷田：説明に感謝する。現在のルサ川における河川改修の方向性について、質問や意見はあるか。私から二点質問がある。一点目は、方向性を一言でまとめるとどうなるか。二点目は、環境省の園地整備とはどのようなもので、どのような関連があるか。

田澤：一点目は、すばらしいルサ川という河川をより良くしていく方向性である。二点目は、河川管理者は羅臼町であるため、河川そのものに関する整備は羅臼町が行うが、環境省のルサ園地整備では、改良した河川を活かす利用ができるような整備をしてほしい。

敷田：説明に感謝する。環境省によるルサ園地整備の具体的な内容はどうなっているか。

岡野：田澤氏の説明の通り、ルサ川は改変された部分もあるものの、サケマスの上見が見られる良好な河川状況であり、知床の世界遺産の価値として重要な場所となっている。ルサフィールドハウスから川へ行き、サケマスの上見が見られるような園地整備を計画している。

敷田：それはいつごろの予定か。

岡野：次年度に設計の修正をかけ、次次年度に整備する計画を進めている。

敷田：整備というのは施設をつくるという理解でよいか。

岡野：はい。施設をつくる予定である。

敷田：それは親水施設のようなものか。

岡野：テラスのような形を想定している。近づいてサケマスを観察できる場所はこの辺りに少ないため、それが可能な場所にしていきたい。

敷田：説明に感謝する。ルサでの園地整備に関しては唐突感があるため、次の検討会議で、方向性や内容を共有してほしい。今までこの件について聞いていただろうか。

西村：適正利用・エコツーリズム検討会議の間ではご報告していない。

敷田：利用に関することなので、報告いただきたい。

西村：承知した。

(3) 北海道東トレイルの開通について

資料３－３ 北海道東トレイルの運用状況について

…環境省・西村が説明

敷田：説明に感謝する。ロングトレイルの説明について、質問や確認事項があればお願いする。

敷田：資料３－３の最初に赤字で書いてある 350km プラス 60km、合わせて 410km が北海道東トレイルという理解でよいか。

西村：そうである。

敷田：ロングトレイルについて特に発言がないようであれば、(4) 国立公園指定 60 周年・世界遺産登録 20 周年記念事業について説明をお願いします。

(4) 国立公園指定 60 周年・世界遺産登録 20 周年記念事業について

資料３－４ 国立公園指定 60 周年・世界遺産登録 20 周年記念事業の進捗

…環境省・伊藤が説明

資料３－５ 知床星空散歩事業の結果について

…斜里町観光協会・新村が説明

敷田：今年から来年にかけて様々なイベントが開催されることは、知床の PR や説明を行う貴重な機会となる。関係者の一層の奮励を期待する。今の説明に関して、何か質問や意見はないか。

愛甲：確認だが、知床星空散歩事業の主催は知床斜里町観光協会でよいか。

新村：よい。主催は知床斜里町観光協会である。

愛甲：では、次年度以降の課題は、知床斜里町観光協会が検討・推進するという事で良いか。

新村：よい。我々が主体となり、ガイド事業者を中心に、周年記念事業実行委員会の意見も参考にしながら進めたい。

愛甲：説明に感謝する。一般的に夜のツアーというとライトアップなどが多いが、夜空を楽しむというのは国立公園ならではの、非常に良い取り組みだと思う。高架木道散策時は展望台までの移動の際には多少は明かりを使用するのか。使用するのであれば、どの程度の明かりを使うのか。

新村：基本的には赤いランプ付きのヘッドライトを用意し、白い明かりは使用しない。赤い光で照らす場合もあれば、何もつけずに目が慣れるのを待つ場合もある。ガイドによって対応が異なるが、明るい光で人を照らす等ということはない。赤いライトを使用する場合も、足元を照らす程度である。

愛甲：理解した。説明に感謝する。

敷田：他に関連して何か意見はあるか。

船木：来年度以降も継続する場合、部会を立ち上げ報告する形になるのか。

新村：我々の希望を述べさせていただくと、周年事業に限らず、この事業を継続したい。閉鎖された場所を利用するため、適切なルール作りが必要になると考えている。その際は、適正利用・エコツーリズム検討会議に相談しながら進めたい。

敷田：船木委員よろしいか。

船木：では、この後エコツーリズム戦略の話になるかと思うが、再度提案をするのか、それとも既に今後の実施は承認されているという理解でよろしいか。

敷田：それは私からお答えする。

新村：お願いする。

敷田：前回の検討会議では、周年事業の一部として説明され、高架木道のみを使用し、動物

を対象としないため、提案なしで承認された。規模や催行場所を変えない限り、現状の内容で良いと思うが、船木委員よろしいか。

船木：よい。私からは確認したかっただけである。

敷田：現行の内容であれば、特に提案することなく実施をしていただきたい。規模や催行場所が変更になれば別途協議が必要と思われる。他に意見がなければ、私から新村氏に質問がある。前回会議での説明では「極上の星空・漆黒の暗闇を体感するナイトツアー」というブランド名を用いていたと思うが、実際の運用時にその名前を使用したのか。

新村：パンフレット等にはサブタイトルという形で使用した。

敷田：ブランド名の付け方は、次の議題でもあるインタープリテーションにも非常に関連するため、今後は配慮が必要である。

新村：承知した。ご意見に感謝する。

敷田：以上、議事 3 全体を通して何か意見はあるか。なければ議事 4 に移る。

4. インタープリテーション全体計画の策定状況について

資料 4－1 インタープリテーション全体計画の策定と活用

…環境省・二神が説明

資料 4－2 ワークショップの実施状況と知床の価値を伝えるテーマとストーリーの案

…知床財団・山本が説明

敷田：今の内容に関して、質問や意見があればお願いします。

愛甲：ストーリーブックを作成していく際に、今年度は作業部会とワークショップを行ったが、来年度の進め方はどのように考えているかを聞きたい。

二神：来年度以降の進め方はまだ決まっていない。今年度は作業部会とワークショップの二つを開催したが、基本的なことに関しては作業部会で議論を行っていた。来年度も作業部会を中心に、ストーリーブックの中身について検討したいと考えている。今年度は地域の価値をワークショップを通じて拾い上げていくことが中心であったが、来年

度はその価値を深堀することを中心にしたと考えている。個人的な意見だが、作業部会のメンバーも見直しながら組み立てていきたい。

愛甲：来年度以降は、ワークショップは開催予定か。

二神：その点については、3月4日に開催する今年度最後の作業部会で検討させていただく。

敷田：感謝する。次に船木委員お願いします。

船木：確認したいことが二点ある。一点目は、2月6日に行われたエコツーリズム WG 委員との意見交換会で質問したことでもあるが、インタープリテーション全体計画（以下、IP 全体計画という）の完成形がどこにあたるのか再度確認したい。資料4-1の4ページを見ると、ストーリーブック（IP 全体計画）という記載があり、ストーリーブック＝IP 全体計画のように見えてしまう。IP 全体計画が計画であるならば、目的や方針、そしてどういった取り組みを行うかを記載するものであり、ストーリーブックとは異なるものであると認識している。今後、世界遺産管理計画やエコツーリズム戦略等に組み込むというところでも違った形になってくる。今一度、どのような完成形を考えているか伺いたい。

また二点目は、（3）北海道東トレイルの開通についての話題の中で、北海道東トレイルの IP 全体計画について話が出ていたが、知床の IP 全体計画との関連性を伺いたい。

二神：今回の IP 全体計画の完成形だが、計画と銘打っているが、資料4-4の2ページに記載されているその場所らしさという「物語（ストーリー）を、いつ・どこで・だれが・誰に・どのように・伝えるべきか（5W1H）、地域全体のインタープリテーションを整理したもの」が、IP 全体計画であり、例として雲仙観光局がまとめた雲仙温泉地区 IP 全体計画がある。

船木：参考資料として、雲仙温泉地区 IP 全体計画を共有していただけると、他の方も全体像のイメージを持ちやすいと思う。また雲仙温泉地区で作成されたものを念頭に話をするが、単にストーリーを書くだけではなく、「いつ・どこで・だれが・誰に・どのように・伝えるべきか」ということも整理するという話である。今年度の知床の IP 全体計画ではストーリーを中心に議論したということだが、来年度以降はそのストーリーの 5W1H を充実化させ計画にしていく作業をするというイメージでよいのか。

二神：船木委員のおっしゃった通りで事業を進める予定である。

船木：説明に感謝する。では二点目の質問について伺いたい。

西村：来年度は、北海道東トレイルの IP 全体計画を策定する予定になっているが、知床の IP 全体計画とどのように関連するかは現在議論されていない。北海道東トレイルはトレイルという一本の道のストーリーを作成するものと考えており、知床の IP 全体計画に合わせて何かする予定はなく、個別で計画の策定が進むものと認識している。

岡野：補足だが、北海道東トレイルの IP 全体計画は、北海道東トレイルで伝えたいことを整理する計画であるが、地図の通り、南からスタートし酪農地帯、火山地帯、畑作地帯、そして海とつながり、知床とつながる展開をそれぞれ体験でき、こういったことを学べるかを整理する形になる。そのため、知床の IP 全体計画と重複する部分は、重ねて記載する形になる。

船木：北海道東トレイルの IP 全体計画の策定は、知床の IP 全体計画とは別々に行われるという認識で良いか。

岡野：その通りで、一つのトレイルを軸に検討するため、トレイル上にポイントがあるかどうかで記載内容も変わるため、策定は別々で考えている。

船木：承知した。

敷田：IP 全体計画の説明の度に内容が変わるイメージがあるが、再度インタープリテーションとは何かを日本語にして教えていただきたい。

岡野：インタープリテーションは、日本語で言うと通訳と言われることがあるが、私たちはその対象と自分との相互関係の中で伝わる意思疎通であると認識している。それを地域として国立公園として、来訪者に感じてほしい、伝わってほしいことを整理し、地域が知床らしさを伝えていく。例えば IP 全体計画があることで、ビジターセンターの展示や映像などを統一感のあるものにすることができ、より来訪者に知床らしさが伝わると考えられる。しかし知床はすでに世界自然遺産に登録された時に、海氷から始まる海と陸の豊かな生態系のつながりという地域で共通のストーリーがあり、それを来訪者に伝えていと思う。そういったことが他にもあるのではないかと。知床らしさがあるのではないかと考え、取り組んでいる。

敷田：説明に感謝する。今後も一貫とした説明をしていただきたいと思う。簡単に言うと知床の価値を自分たちの言葉で説明しようということか。それが具体的に何になるかは、現状では想像がつかないが、ストーリーブックは来年度発行予定でよろしいか。

岡野：その通りである。船木委員からご指摘のあった IP 全体計画は何をするかという点であるが、分かりやすく伝えられる形でストーリーブックという言葉を使用していることを含めご理解いただきたい。

船木：双方向のコミュニケーションという言葉があったが、資料 4－1 に環境省の役割と各事業者の役割について記載がある。双方向ということであれば、そこに観光客とのコミュニケーションの中で生まれる観光客側の動的な意見を上手く取り込んでいけるとより良いと考える。

敷田：コメントに感謝する。観光客側からの意見や思いと一緒に反映できれば良いと思うというコメントであった。

岡野：以前、敷田座長から共創という言葉을いただいているため、共に創ることが非常に重要であると考えている。

敷田：現代社会の価値はお客さんと一緒（共創）でなければもう作れなくなっており、（資源をもつ側から）提供する価値はすでに、「価値がない価値」となっているため、以上のことをよろしく願いたい。

5. エコツーリズム戦略の見直しとエコツーリズム検討会議の進め方について

資料 5－1 エコツーリズム戦略運用の経緯を踏まえた成果と課題

…知床財団・秋葉が説明

敷田：説明に感謝する。これに関して意見や質問はあるか。

石黒：先ほどのインタープリテーションの話で共創という言葉が出たが、これまで我々の共創のパートナーは常に地域内にいて、日本語が通じる相手との意思決定であった。しかし、今後は訪日外国人旅行者が来訪し、事業者も地域の事業者のみでなくなる可能性が考えられる。ニセコなど、既に外国からの資本が入っている地域ではいわゆる「地元」の論理で物事を決めることは難しく、従来よりも意思決定のプロセスを対外的に分かりやすい形にすることが求められていると感じる。そのため、エコツーリズム戦

略の見直しを機に、より分かりやすい形に整理していく必要があり、場合によっては他の計画を統合していく作業が非常に重要であると思う。コメントになってしまったが、過分に対外的に説明しなければならない時代になっているという現状を委員の方と共有をしたかった。

資料５－２ エコツーリズム戦略の見直しの方向と構成案

…環境省・二神が説明

敷田：資料５－１及び５－２を含めて、エコツーリズム戦略の見直しの方針と構成案という提案が環境省からあったが、これに関して質問や意見があればお願いします。

長谷川：エコツーリズム戦略の見直しはゾーニングについても入っているか。知床岬の携帯基地局建設について賛成や反対があるが、私は推進派である。そしてこのゾーニングについてぜひ見直していただきたい。知床半島で統一するのではなく、斜里町と羅臼町でゾーニングを分けた方が良い。知床岬の携帯基地局建設反対について署名もあったが、それは斜里町の管轄で行われたものである。知床岬の灯台は斜里町に位置するが、赤岩とニカリウスは羅臼町である。携帯基地局建設中止について、知床岬は百歩譲って仕方ないと思われるが、ニカリウスの携帯基地局建設を止めたことに羅臼町の漁師は非常に憤怒している。科学委員会では知床岬付近でオジロワシの営巣が確認されたなどの話があった。羅臼町の昆布漁師も現状では赤岩から番屋は撤退している。しかし、いつか赤岩で天然の昆布漁を再開する可能性もあり、こういった際にゾーニングで斜里町と羅臼町を一つにまとめられると必要な時に携帯基地局の建設が進められなくなる。一つの団体からこういった意見が出たことを踏まえて再度ゾーニングを検討していただきたい。

観光船事故がもう一度発生した場合は、知床に観光客が来なくなる。トレッキングやカヌー等で転覆し漂着し、救助要請を出したいが現状は通信のインフラはない。世界自然遺産の中でも最低限のインフラ整備は必要であると思う。

敷田：発言に感謝する。出席者の方には、それぞれが多様な意見を持っているため、この発言をそのまま受け取っていただきたい。他に発言はあるか。

愛甲：エコツーリズム戦略の見直しの方針で、事務取扱要領の見直しはエコツーリズム戦略の改定後に着手すると説明されたが、それで良いのか懸念する。現行のエコツーリズム戦略の内容としては、検討会議の位置づけや提案制度に対する対応の部分のあとの後半部分に、エコツーリズム戦略の実行体制が記載されている。この実行体制を円滑に進めるための手続きを定めたものが事務取扱要領である。近年、様々な議題が提起

されつつも、中々提案に至っていないことから、エコツアーリズム戦略の見直しと同時に事務取扱要領を見直さないと問題は解決しないのではないかと。

また、エコツアーリズム適正利用はWGと検討会議の二つの会議を持っていることが、非常に特徴的であるが、WGと検討会議の役割分担が不明瞭になっている気がする。WGは長期モニタリングの対応や IUCN からの勧告があった際の内容の精査をするなどの専門的な立場からの役割がある。一方検討会議は、地域での様々な検討事項や取り組みに対しての報告をいただき、それに対し助言をすることは私たちも臨み方が異なるはずである。今回これらを明確に整理していただかないと、エコツアーリズム戦略の改定をするだけでは、根本的な問題解決につながらないのではと危惧する。一つ一つの部分で先ほど意見があったゾーニングをどう組み込むかや、IP 全体計画をどう組み込むか等に関しては細かく検討する必要がある。ただ、それと同時にこの検討会議の設置要綱自体を見直しても良いのではないかと感じたがいかがか。

敷田：意見に感謝する。大きく分けて二つの点だが、事務取扱要領とエコツアーリズム戦略の見直しは同時に検討した方が良いのではないかとということと、エコツアーリズム適正利用の委員のWGと検討会議の棲み分けも検討すべきであるという意見であった。

柳川：ご指摘のあったエコツアーリズム戦略改定前に、検討会議とWGのあり方を検討し、修正すべきというご意見について、おっしゃるとおりである。資料5－1で、過去10年間の実績と成果及び課題等が整理されているため、これを踏まえ、検討会議及びWGのあり方、役割分担等を含め改定すべき点について、次回検討会議などを使いながらみなさまと検討したいと考えている。その整理が終了した段階で、エコツアーリズム戦略の改定に着手すべきであり、それに付随する事務取扱要領の改定もあわせて行いたいと考えている。

敷田：エコツアーリズム戦略の改定は、検討会議とWGのあり方や役割分担の整理がついてから進めるという発言であった。次回以降、この検討課題をWGで協議するか。

柳川：例年通り、WGと検討会議のそれぞれの場であり方の検討をさせていただきたいと考えている。

敷田：私の質問は、事務局で案を作成し会議の場で提案をするのか。またはWGや検討会議で出席者自ら検討をしていくのか進め方を明確にしてほしいという質問である。

岡野：まだ決められないが、予定としては事務局が考えるのではなく、まずはWGでの議論をさせていただきたい。

敷田：エコツアーリズム戦略の改定を一旦止めて、その前にあり方についてWGの委員と相談した上で、検討会議に相談するという2段階を踏んで進めるということになるがよろしいか。

岡野：エコツアーリズム戦略の改定を止めるというよりは、エコツアーリズム戦略をどう実施していくかのための事務取扱要領であり、改定の議論を止める必要はないと考えているが、愛甲委員はどういった進め方のイメージをしていたか教えていただきたい。どちらにせよ、次年度はIP全体計画の議論を並行して進める予定のため、直ちにエコツアーリズム戦略の見直しについて検討するわけではない。知床らしい体験をどのように実現していくかのために検討会議があり、検討会議がどのように運用されれば地域からの提案が出てきて、上手に回っていくのかということを議論していく際の目安となるものがエコツアーリズム戦略である。そのために検討会議やWGのあり方など目指すべき点を考え、反映した形がエコツアーリズム戦略になると思う。

愛甲：承知した。付随して、今年度よりエコツアーリズム適正利用WGの委員が変更になり、地域から松田委員が参加しており、WGの中でも提案制度そのものに対して、議論を行える状況である。今まではエコツアーリズム戦略の見直しで一番の議題であったことに具体的なイメージができなかったため、今後は提案者側や地元側の立場に立った視点で行う必要がある。今回は今の仕組み上に則って、WGで事務局と一緒に素案を作ることは行うが、その上で検討会議に案を出し、出席者と共に考えなければならないと思う。私の発言により、時間がかかってしまう可能性もあるが、この通り進めた方が、現状の課題が少しでも良い方向になるのではないか。

岡野：承知した。その通り進めさせていただく。

敷田：基本的にWGというのは、専門家が科学的な議論や意見交換をするために科学委員会の下に位置づけられている。一方で、検討会議は地域の利害が絡む場に専門家が第三者的な意見を述べることで、決定者だけではなく、関係者が対等な立場で関与することと整理されている。その性質の見直しも含め考えていただきたい。

また検討会議に提案制度が組み込まれているのはIUCNの勧告に従ってこの仕組みが作られた経緯がある。またWGというのは科学委員会の設置とともに必然的に作られた存在になっているため、その点をもう一度見直し整理していただくことになる。加えて、提案制度については、はじめの3年間の検討の中で、環境省・林野庁・北海道といった管理者側が検討会議で議題や資料を説明することに対して、地域は意見や文句を言うのみであった。そのため、地域側から発意できるようにしようという

ことで作られた制度である。したがって、課題で整理していただいたように、完全に理想的に動くという想定を最初からしていない。しかし提案がないから制度を止めてしまうという理屈は通らないと考える。WG と検討会議の振り返り資料があるため、今回のことをみなさまで振り返り深く考え議論をしていただく良い機会であると思う。

6. その他

資料 6－1 2024 年度 知床国立公園利用状況調査の結果（暫定版）

資料 6－2 長期モニタリング計画に基づく聞き取り調査の結果について

…知床財団・秋葉が説明

敷田：説明に感謝する。資料 6－1 は、知床の利用状況が反映された毎年手間のかかっている貴重なデータである。オープンデータ化についても前回議論されているため、前回の議事概要を参照いただければ、データを活用しようという形にしていることが分かる。以上で本日の議事は終了する。本日は検討会議に参加していただき感謝する。議事全体の振り返りだが、議事 1 のエコツーリズム戦略に基づく提案の進捗を確認した後、議事 2 の個別部会からの報告が 4 件あった。知床五湖エコツアー事業については新村氏より利用者の増加傾向や今年度の現状について話していただいた。斜里町からはカムイワッカ部会の取り組みを含めた提案の説明をいただいた。議事 3 の関係機関の取り組みは、斜里町からアクティビティサポートセンターの設置や取り組みについて説明をいただいた。環境省からは北海道東トレイルの開通や周年事業、IP 全体計画、エコツーリズム戦略の見直し、そして検討会議のあり方について説明をいただき、本日は非常に重要な議題を取り扱った。次回開催は半年後になるが、本日の検討会議を忘れないよう議事概要を再度確認いただき参集願う。

西村：円滑な議事進行に感謝する。環境省から資料 2－4 について補足をさせていただいた。敷田座長より、ケイマフリの生息繁殖状況についての質問をいただいた件だが、ケイマフリの最大個体数は右肩上がりだが、営巣数は何故横ばいなのかという質問であるが、ケイマフリの営巣場所が崖であり営巣の全数を把握することができないため横ばいの記録となっている。

最後に、敷田座長が本日の検討会議をもって、座長を退任されるため、最後のご挨拶をお願いしたい。

敷田：「今回の検討会議をもって、座長及び委員を退任させていただきたいと思います。3 月 5 日に科学委員会が開催されますが、専門家としてみなさまとお会いするのは本日が

最後です。世界自然遺産の周年事業の年で、この役割から離れることは大変惜しい気もしますが、5年前に再任された時に5年後には退任しようと決めていたため、お許しいただきたいと思います。

検討会議は正直大変であり、厳しい意見もあり、嫌になることも多く、検討会議に出席する際は大量の資料を読み込む必要があり、憂鬱で難しい仕事でありました、というのは嘘であり、毎回非常に楽しく期待を込めて検討会議に出席していました。毎回、検討会議が終了した後は元気よく帰れており、それはみなさまが支えてくださったお陰であると思います。

この仕事を辞めるのは3月末日で定年退職を迎えるためであり、専門家として体力や気力を維持しながら行うのは、大学での仕事を離れた後には難しいと自分で考えたからです。料理人の包丁が切れなくなったら辞める、味が受け入れられなくなったら辞めることと同じであると思っていただき、大変わがままな理由で辞めさせていただくことになりますが、ご容赦いただきたいと思います。

さて、今日のこの日があるのは15年目に遡ります。知床とおつきあいは、15年目に遡ります。それまではほとんど縁がありませんでした。それは2010年の2月2日に（当時環境省釧路自然保護事務所の）則久次長とこの会場の対面にいる三宅さんから、この役割についての説明を北大の研究室で聞いたのがスタートでした。2010年に4月13日に初めての打ち合わせに知床に来てから15年がたちました。

もともとIUCNの勧告が直前にあり、それを受けてのエコツーリズムの推進の動きの中での依頼でした。また相談の際に則久さんが「知床議会」が必要だと云っていたのでそのとおりに進めてきました。しかしそうした思いとは別に、2010年に会議が始まったときは、ホテル知床で開催 100人規模の場で、対面の方の表情も解らない会議がここまで来たかと思うと感慨深いものがあります。

知床での私の役割は、この会議の司会者であり、ある意味では調停者、仲介者、決定をする裁判官の役割でした。めまぐるしくその役割をかえて演じてきました。そのため解りにくい立場となっていたと思います。

私の仕事の目的は皆さんが出席者から参加者に代わることを促進することでした。出席と参加は意味が違います。意見が異なる参加者が自由に意見を言える場にすることが重要だと思ってやって参りました。

15年間でまがいなりにもIUCNが期待した以上の成果を上げてきたと思います。それは私が担当したからではなく、おそらく参加された一人ひとりの、知床を何かよくしたいという思いによるものだとも思います。

一方、一年に6時間の会議で重要なことが次々決められるとは思えません。これからも地道な話し合いの場が継続できるように思っています。知床に多くの時間を割いてきましたが、皆さんから学ばせていただいたものも多く、心からみなさん、というよりおひとりおひとりとかわってよかったと思います。皆様のこれからを信じて、

安心して退場したいと思います。」

西村：長い間、座長を務めていただき感謝する。続いて、委員を代表し座長代理の愛甲委員よりご挨拶を願う。

愛甲：委員を代表し、参加者の一人としてお礼を述べたいと思う。15 年間に渡り、検討会議の立ち上げやエコツーリズム戦略の作成を行われ、非常に多くのことをいていただいたと思う。また会議が終了した後は元気になるという話があったが、私も同じ気持ちで、色々と難しい課題があっても検討会議の参加者と顔を突き合わせて、その場で考え話しをする。私の研究にとっても非常に大きな体験をさせていただいたと思う。地域と知恵を絞りあい、専門家としての役割も果たし、地域から出た様々な意見が出て、喧々諤々となり大変であったが、それを上手く捌いていただいた。みなさまと話し合う場が継続していることは非常に素晴らしいことであり、今後も私達で引き継いでいきたいと思う。しかし、先ほどもあったが現在も課題が非常に多くあるため、敷田座長にはエコツーリズム戦略の見直しも含め、引き続き相談に乗っていただければと思う。以上、私からの感謝の言葉とさせていただきます。お礼申し上げます。

西村：ご挨拶に感謝する。それでは以上をもって令和 6 年度第 2 回適正利用・エコツーリズム検討会議を終了する。

(閉会)